

BOOK



この物語は、保育士になつて8年目の女性、舞衣子さんの、4月から翌年の3月までの1年間の物語である。保育園は多くの人々に支えられた舞台であるから、登場人物は多彩である。朝海園長を始めとした保育士スタッフ、看護師、調理。そして委託の用務員さんというふうだ。

さらに、保育園には必ず保護者がいる、その職業もまた多彩である。霞保育園は都心の区立保育園であるためか、近くの霞商店街でお店を営んでいる人々から、建築家、弁護士、アナウンサー、帰国子女の母親やDV被害者などだ。こうした多くの登場人物と女性保育士との1年間の関わりが縦軸になっている。



喜びと涙と秘密が詰まった物語。ラスト、この物語のもう一つの意味が……

この本を読んだらもう一度、保育園に行きたくなる。

八月書房

霞保育園で待っています

園であるためか、近くの霞商店街でお店を営んでいる人々から、建築家、弁護士、アナウンサー、帰国子女の母親やDV被害者などだ。こうした多くの登場人物と女性保育士との1年間の関わりが縦軸になっている。

そして横軸は、商店街を中心としたコミュニティである。それは朝海園長の次の言葉で表現されている。「保育は保育園だけでやっているのではない。家族と共に、地域と共に、子どもたちの成長をみている」。保育園は行事が多い。行事のたびに地域の人たちや保護者が助っ人になってくる。霞保育園は、この地域のシンボルなのだ。

実はこの物語は最後の最後で、20年前の回想であったことが明かされ、意表を突く結末を迎える。評者が自分の子ども

を保育園に預けていたのは、20年前よりさらに昔、40年以上も前のことなのだ、それでもこの物語を読んでるうちに我が子の保育園時代を懐かしく思い出した。

40年前や20年前とは異なり、現在の保育状況は激変している。著者が舞衣子さんや朝海園長に託して言わんとすることは、保育状況が激変しても変わらないものがあるということだろう。変わってはならないものがこの物語には詰まっている。著者は元都庁職員であり、この物語にも児童相談所の経験が織り込まれている。公務職場も、公務員をめぐる状況も保育状況と同様に激変している今、著者の手による第2弾、第3弾に期待したい。

定価 1400円＋税
（認定NPO法人まちぼると理事 伊藤久雄）

麻海晶著 八月書館刊